

石牟礼道子の世界

—事実・表現・想像力—

講師◎米本浩二さん

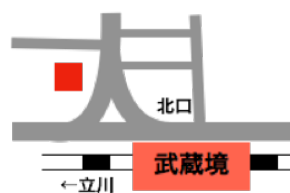
『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』の著者

日時 | 2020年2月8日(土) 午後2時-4時 (開場1時30分)

会場 | 武蔵野スイングホールレインボーサロン (南棟11階)

JR中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」北口下車徒歩1分

参加費 | 1,000円 受付 | 申込み先着200名 (全席自由席)



*台風19号の影響を考慮して、2019年10月13日(土)開催予定の講演会を中止し、ご迷惑をおかけいたしました。日時と場所を変更し改めて開催するものです。結果的には会場は当日全館閉鎖となりました。

『苦海浄土』出版から50年。石牟礼道子は何を問いつづけたのか。
没後2年。命日2月10日を前に、生前最も信頼されていたジャーナリストが、
石牟礼の人間像とその知られざる魅力を語る。



「生まれてすみません」とは太宰治の有名な言葉ですが、石牟礼道子さんも「生まれてすみません」と言わんばかりに、ごちなく不器用にこの世をきたた人でした。邪念と痛苦のこの世界で、再三の自殺未遂をへて、自らの孤独に見合う孤絶を水俣病患者に見出します。患者を救済する前に自分を救済しなければならなかった。患者を書くことで、生の回路を開きます。前近代と近代、生と死、この世もうひとつのこの世、のはざまに立ち、水際立った言葉を紡いでいきます。代表作『苦海浄土』の主要登場人物の「ゆき女」や「杳太郎の祖父」の語りに注目し、フィクションとノンフィクションの本来の意味を考察しつつ、石牟礼文学の深奥に分け入ります。
(講師・米本浩二さんからのメッセージ)

■米本浩二 (よねもと・こうじ)

1961年生まれ。徳島県庁正職員を経て早稲田大学教育学部卒業。毎日新聞記者。水俣病を告発した著書『苦海浄土』で知られる石牟礼道子を長期に取材し、毎日新聞西部本社版に「不知火のほとりて 石牟礼道子の世界」を2014年から足かけ6年、70回にわたり連載。好評を博した。現在も石牟礼道子資料保存会研究員として石牟礼文学の調査、研究を続ける。2018年に『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』(新潮社)を出版し、第69回読売文学賞を受賞。石牟礼の晩年、記者としての立場を超えて常に身近に寄り添い、身を尽くして介護にあたり全幅の信頼を得た。最近刊の受賞作続編『不知火のほとりて 石牟礼道子終焉記』(毎日新聞社)は、最期を看取ったジャーナリストとして作家晩年のありのままを描きだした渾身の力作。文芸誌『新潮』で「石牟礼道子と渡辺京二 不器用な魂の邂逅」を連載中。

【お申し込み方法】往復ハガキで2020年1月15日までに下記「本をたのしもう会」事務局あてにお申し込みください。なお、締め切り日前でも、定員になり次第、締め切らせていただきます。往信裏面に、郵便番号、住所、参加者名(ふりがな)、電話番号をご記入ください。同伴者がある場合は、全員の名前(ふりがな)をお書きください。返信表面に申込者の住所・名前をご記入願います。

■本をたのしもう会事務局 〒180-0001 武蔵野市吉祥寺北町1-8-2 (畑方) 問合せ ☎ 090-2662-5218

www.npo-honwotanoshimoukai.com

■石牟礼道子（1927-2018）



代表作『苦海浄土』が英独語に訳出され、池澤夏樹個人編集『世界文学全集』（全30巻、河出書房新社）に日本人の作品の中で世界文学に位置づけるべき長編としてただ1点だけ収められるなど、現代日本を代表する文学者として極めて高い評価を獲得。歌人、俳人、詩人、エッセイスト、小説家、能作家として多岐にわたる文学活動を展開したその膨大な著作は、全17巻+別巻の『石牟礼道子全集・不知火』に集成されている。水俣病に象徴される近代化がもたらす自然破壊、人間破壊のおぞましさを告発し、苦しむ人々に寄り添い身悶えするなかで、「いのち」の回復と「魂」の救済がいかにして可能となるのかを問い続けた。

主な著作：『苦海浄土一わが水俣病』（講談社1969、講談社文庫〔新装版〕2004）、『苦海浄土全三部』（藤原書店2016）、『椿の海の記』（朝日新聞社1977、河出文庫2013）、『石牟礼道子全句集 泣きなが原』（藤原書店2015）、『石牟礼道子全集・不知火』全17巻+別巻（藤原書店2004～14）、池澤夏樹個人編集『世界文学全集』全30巻・Ⅲ-4「苦海浄土」（河出書房新社2011）、同前『日本文学全集』全30巻・24「石牟礼道子」（同前2015）。最新刊に『石牟礼道子全歌集 海と空のあいだに』（弦書房2019）。

石牟礼道子と水俣病 略年譜（敬称略）		
	1927	白石亀太郎とハルノの長女として、熊本県天草郡（現・天草市）に生まれる。生後3カ月で水俣町（現・水俣市）に移る
	1943	水俣実務学校卒業。代用教員となる
	1947	退職。石牟礼弘と結婚
水俣湾周辺で多数の猫が死ぬ。原因不明の中樞神経疾患散発	1953	
水俣病発生の公式確認	1956	
	1958	筑豊の労働者文芸交流誌「サークル村」に参加。谷川雁、上野英信らに出会う
	1960	『苦海浄土 わが水俣病』第3章「ゆき女きき書」の原型となる「奇病」を「サークル村」に発表
	1965	『苦海浄土 わが水俣病』の初稿「海と空のあいだに」を連載
政府が水俣病を公害病と認定	1968	「水俣病対策市民会議」結成
水俣病患者29家族が熊本地裁に第1次訴訟を起こす	1969	『苦海浄土 わが水俣病』刊行。渡辺京二の呼びかけで「水俣病を告発する会」発足
	1970	『苦海浄土 わが水俣病』、第1回大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれるが受賞辞退
		水俣病患者や告発する会とともに上京。同会メンバーらが厚生省（当時）補償処理会場を占拠
	1971	川本輝夫らが自主交渉闘争開始。患者らとチツソ東京本社に座り込む
	1972	自主交渉闘争で東京・水俣間往復
水俣病第1次訴訟、熊本地裁で原告勝利。訴訟派と自主交渉派はチツソと交渉し、「補償協定書」に調印	1973	「アジアのノーベル賞」フィリピンのマグサイサイ受賞。季刊誌『暗河』創刊
	1974	『苦海浄土』第3部「天の魚」刊行
	2003	パーキンソン病と診断される
	2004	全集刊行開始（～2014年）。「苦海浄土」第2部「神々の村」完成で3部作完結。新作能「不知火」水俣奉納公演
	2011	『苦海浄土』3部作、「世界文学全集」（池澤夏樹・個人編集）に日本文学（長編）で唯一収録される
	2015	池澤・個人編集の「日本文学全集」第24巻が「椿の海の記」など15作を収録
		夫・弘が死去
	2016	熊本地震で被災
		水俣病60年記念特別講演会（東大安田講堂）に熊本からインターネット中継で参加
	2018	2月10日、熊本市で逝去

出版 NPO「本をたのしもう会」は、広く読書推進活動を行うための非営利グループです。マスコミや教職関係の OB・現役、地域のコミュニティ活動や文化活動に関心のある市民など、武蔵野市を中心とする多摩地区在住の志を共にするメンバーが集まって活動しています。読書の面白さや魅力を知ることから自ら考える能力を培うだけでなく、同時代を生きる人々と交流を深め、経験を共有することで、豊かな市民文化を形成することをめざしています。